
単語一個短編集

ゆうかた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

単語一個短編集

【Nコード】

N7616K

【作者名】

ゆづかた

【あらすじ】

単語一個で短編小説を書き、それをまとめていくのが、この短編集。カオスだったり、不思議だったり、泣きがあったり、いろいろなものが楽しめる？

眼球

朝、目が覚めたら、急に視界が狭くなっていた。

気になったので、洗面所で鏡を見たら、右目がなかった。

血は流れていなかったけれど、やけにスースーして、風通しが良い。眼球のあった場所は真っ黒。ブラックホールみたいに穴が空いている。

指を入れてみようと思ったけど、気持ち悪くて吐きそうになった。

仕方ないので、朝ご飯を食べることにし、リビングに向かう。

「おはよう、母さん」

「おはよ　っ!?!?」

僕を見た母さんは、今にも顎が外れそうなくらい口を開いて、眼球が飛び出そうなくらい目を見開いて、呆然としていた。

しかし、母さんはそのまま気を失ったので、僕はパンを食べて、学校へ行った。

途中、何人か僕と同じように眼球のない人とすれ違ったけど、別に驚きはしなかった。

「朝から、なんてグロテスクな話かしら。嘘なら嘘で、もっと面白い嘘を吐きなさいよね」

「それって、何？　妄想？　お前、普段からそんなグロいこと、考えているのかよ」

「そうだなあ、とりあえず、エイプリル Fool 乙、^{おっ}とでも言っておこうか」

クラスの友達は、言いたい放題だった。

結局、今年もすぐに見抜かれてしまったよ、僕の嘘が。
それにしても、エイプリルフールって、何であるんだろう。

イイ声

ある日、携帯電話についている録音機能の保存場所に、見覚えのないデータがあったのを僕は見つけた。

それは、サンプルというわけではなく、きちんと誰かのイイ声が録音されていた。

そのデータは、日に日に増えていき、今では300を超えている。ちなみに、途中で、携帯電話自体の容量が限界に達してしまったので、録音データはSDカードに移してある。

さて、その録音データには何が入っていたかと言うと、男性の素敵でイイ声が、何かカッコイイことを喋っていた。

アニメやドラマの決め台詞っぽいときもあつたし、口説き文句みたいなものも録音されていた。

その録音データは、ほぼ毎日、深夜帯に保存されている。

僕は気味が悪くなり、部屋の中に何か、誰かがいるんじゃないかと思って、一日かけて探し続けた。

けれど、何も、誰も見つからなかった。

そこで、僕はウェブカメラをセットし、ネット上で知り合った友人に、一晩中見張ってもらうことにした。

「これで、何も解決しなかったらどうしよう……」

そんな不安を抱えながら、僕は眠りについた。

翌朝、私はすぐにネット上の友人に連絡をとった。

すると、その友人は笑いながら

「何、自分で録音しているんだよ。あっはっはっは」と、そう言った。

私は、彼が何を言っているのか理解できなかった。
でも、詳しい説明を聞くことで、全ての謎が解けた。

「どうやら、夢遊病の一種ではないか？」と友人は言っていた。

私は、夜な夜な、レム睡眠を継続させながら携帯電話を操作し、
自分の声を録音していたようだ。

「それにしても、僕って、なんでイイ声なんだろうか」

「自画自賛、乙」

イイ声（後書き）

イイ声、羨ましいです・・・

コーヒー

休日の昼下がりは、非常に心地よい。

お客が入り乱れた午前中は、本当に戦場のようだった。

しかし、今は店内に俺以外誰もいない。

広々とした店内で、一人で飲むコーヒーはいつもより格段に美味しい。

カラン、コロン！

ドアベルが来客の入店を知らせてくれた。

「いらっしやいませ」

「マスター、いつもの、頂戴」

栗色で艶のあるロングヘアを持った一人の女性が、カウンター席に腰掛けた。

髪の毛のふんわりとした甘い匂いが、男の中の何かを呼び覚ましそつだ。

「“いつもの”とは、私が把握わたくししているものでは、二種類あります
が……」

「そうねえ……今日は“ブルーマウンテン”を頂こうかしら」

「ブルーマウンテンですね、かしこまりました」

常連の彼女に、俺は一目惚れだった。

ボンツ、キュツ、ボンツ、な抜群のスタイルはともかく、優しくて大人っぽい面に俺は惹かれた。

ちなみに、彼女が好きなブレンドは、ブルーマウンテンとモカだ。

「うん、やっぱりおいしいわね」

笑顔を浮かべる彼女は、やはり、本当に美しくて、こづい無邪気な表情を見せるところも可愛らしい。

出来ることなら、お近づきになりたいのだけど。

カラン、コロン！

ドアベルが鳴り、入ってきたのは、顎に髭ひげを蓄たくわえた初老の紳士。

「よう、嬢ちゃん。また、ブルーマウンテンか。本当に好きだねえ」

「もう、“嬢ちゃん”はやめてくださいよ、マスター」

「ワシからしたら、十分“嬢ちゃん”だよ」

初老の紳士はそう言うと、俺の方を向いて

「ん、おい、坊主。皿洗い終わったのか？」

「は、はい！」

俺は、背筋をピーンツと伸ばし、大きな声で返事をした。

「そうか………で、また、“マスターごっこ”か？」

「は、はい………」

ふふふつ、と優しく微笑む彼女。

俺もつられて照れ笑いをした。

「それじゃ、ごちそうさま、未熟なマスターさん」

「あ、お会計は」

彼女は、俺に向かって可愛くウィンクをし、すたすたとお店を出ていった。

初老の紳士 本当のマスターは、

「相変わらずだな、あの泥棒猫」

と溜息交りにそんなことを言った。

「……………今度、告白しようかな」

個人的には、お金よりもウィンクが貰えただけで十分だった。

コーヒー（後書き）

コーヒーのブラックより、コーヒー牛乳が好きです。あと、いちご牛乳も

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7616k/>

単語一個短編集

2011年10月5日23時57分発行